

2

戦前期の郊外住宅地の形成と宝塚文化との関係について

— 広報誌『山容水態』の記述に見る箕面有馬電気軌道沿線の住宅地と宝塚 — (2012年度)

安野 彰

住生活デザイン研究室

明治43年3月に開通した箕面有馬電気軌道(阪急電鉄の前身。以降、箕有電軌と記す)は、宝塚に新温泉や少女歌劇をはじめとする娯楽施設を運営しつつ、分譲住宅地の開発を手掛け、沿線の郊外空間を作り上げていった。その手法は、他地域でも広く用いられ、我が国の大都市近郊における市街化の方向性に多大な影響を与えた。そして、箕有電軌や阪急沿線住宅地のイメージは、清新さを謳う宝塚少女歌劇のテイストを基調に形成されたとも言われる。

箕有電軌沿線の住宅地を対象とした既往研究では、土地の取得と運用の方法や住宅や住宅地のハード面の特徴に絞った見方が主流であり、イメージされていた住環境については検証の余地が残されている。また、宝塚少女歌劇と沿線住宅地の両者に共通の理念や計画が先験的なものとして語られがちである。これに対し、本研究では、沿線住宅地のイメージと宝塚文化の形成過程の一端について、両者の関係性に注目して再考した。

主資料とした『山容水態』は、大正2年7月から6年8月にかけて凡そ月刊で発行されていた箕有電軌の広報誌である。住宅や住宅地の他、箕面動物園や宝塚新温泉といった娯楽施設やそこでの催し、園芸が盛んな土地や名所旧跡などの紹介が細かにされている。宅地や住宅の平面図等の図版も数多く掲載され、また、居住者の経験談風に綴られるなど、郊外の住環境を平易に伝えようとしている。こうした記事や広告のうち、住宅や住宅地に関して書かれたものを通覧しつつ、特に言及の多い、池田、桜井、岡町、豊中、宝塚といった住宅地に関する記述を見直すなどして、当時の人々が抱いていた箕有電軌沿線への憧憬の一端を明らかにし、その過程で浮上する住宅地としての宝塚の特異性につ

いて考察した。以下にその概要を記す。

『山容水態』の誌名は、沿線の地勢を表し、北と東に連なる山々と武庫、猪名、箕面などの河川を指すが、記述から、特に箕面の山と宝塚を流れる武庫川の水面がそれを代表していたと見られる。美しい山水による風光は、沿線の魅力であり、池田でも、五月山と猪名川がイメージされていた。

山と水の存在は、衛生面からもその意義が見いだされている。すなわち、山が冬の北風を遮り、清流が夏の涼を運び、過ごしやすい環境を造る。井戸水が清澄であることも強調されていた。一方、通風と採光といった住宅における衛生面の重視は、庭付き一戸建ての形式と、L字形の平面に反映され、重視された園芸用の庭と親和性を持ったと考えられる。住宅地における医療機関の有無や質に気を遣うことも含め、「山容水態」とは、風光の明媚を示すだけではなく、衛生という科学的視点を踏まえた土地や風景の見方を含んでいたと言える。

また、他社沿線の開発が先行するなか、歴史が浅く新しいことを経済面から肯定的に捉える記述もあり、様々な条件から「清新さ」を意識した様子を見受けられる。

そうしたイメージ構築において、宝塚の花街は、異質な存在と捉えられていた。花街には、当時、淫猥で古いという認識が出来つつあった。箕有電軌による宅地開発がないにも関わらず、住宅地としての宝塚への言及が多いのは、そうした淫猥さや古さを別のイメージで置き換えようとしたためと見られる。池田は住宅地としてのイメージに適ったが、宝塚は沿線終端に位置する「水態」の代表地でありつつも、花街を抱えた両義的な存在だったと捉えられる。

『山容水態』の記述を見る限り、箕有電軌では、山と水が作り出す衛生的で「清新な」環境が強く意識され、それに相応しい住宅の提示、他電鉄沿線との差別化が行われていた。「清新」さは、その当時発足した宝塚少女歌劇が後に掲げる理念「清く正しく美しく」にも通じる。すなわち、宝塚文化の基底となる概念は、箕有電軌沿線の土地が持ち合わせていた住環境上の特徴が反映された可能性を指摘できる。



『山容水態』に掲載された池田の住宅地